

序 説

中枢神経系における炎症性疾患は脱髄～自己免疫性疾患～種々の感染症に至るまで、非常に多岐にわたる。正確に診断がなされないと、治療が無効になるばかりでなく、むしろ増悪する可能性がある。画像診断が大きな役割を果たすことはいうまでもない。特徴的な臨床像や画像所見の特徴を正しく理解することで、自信をもって診断することが可能になる。しかしながら一方で、それぞれの疾患において原因が異なるにもかかわらず、画像所見がオーバーラップすることもしばしばである。また、ほかの炎症性疾患だけではなく腫瘍性病変との鑑別が必要なものまであり、主治医や読影医がとても困惑することがある。それゆえ、診断に苦手意識をもつ放射線診断医も多いと推察する。

本特集は「中枢神経系の脱髄・炎症・感染症」と題して、脱髄性疾患、感染症や自己免疫性疾患を含めたさまざまな脳炎の画像所見を神経放射線診断のエキスパートの先生に豊富な画像を用いて詳説していただいた。

多発性硬化症(MS)は成人の脱髄性疾患のなかで最多であり、日常の読影で目にする機会も多い。京都大学ブレインヘルスケア・ビジネスエコシステム寄付講座の渡邊啓太先生らには、MSの臨床像、McDonald診断基準、典型所見、適切な撮像法や鑑別を要する疾患、さらには多発性硬化症治療薬によって生じる進行性多巣性白質脳症(PML)の特徴について広くご解説いただいた。東北大学病院 放射線診断科の穴場比奈野先生らには、多発性硬化症以外で重要な脱髄性疾患である視神経脊髄炎スペクトラム疾患(NMOSD)、抗MOG抗体関連疾患(MOG-AD)、および急性散在性脳脊髄炎(ADEM)の画像所見や鑑別点についてご解説いただいた。滋賀医科大学 放射線医学講座の沖 摩耶先生らからは中枢神経系の感染症に関して、種々の細菌、結核、ウイルス、真菌および寄生虫など多岐にわたる感染症について、commonなものからrareなものまでそれぞれ豊富な画像を用いてご解説いただいた。そして、虎の門病院 放射線診断科の住田 薫先生からは、さまざまな脳炎の画像診断というテーマで神経サルコイドーシスや種々の血管炎症候群、自己免疫性脳炎に関してご解説していただいた。とらえどころのない難しいテーマであったにもかかわらず、貴重な症例を多く提示しながら、それぞれの疾患に関してわかりやすく解説していただいた。

いずれのテーマも、貴重な症例を数多くご提示いただいたので、神経放射線診断を専門としない一般の放射線診断医の先生にもわかりやすく非常に有益な内容になっていると確信している。そして、本特集が読者の先生方の読影の一助になることを期待している。最後になりますが、難しいテーマにもかかわらず、またコロナ禍の多忙をきわめるなか、本特集に素晴らしい内容の記事をご寄稿いただいた先生方に心から感謝申し上げます。

鹿戸将史